

自閉症児家族と大学生ら触れ合う



子育ての苦労や楽しさなど、保護者の「生の声」に学生たちは耳を傾けた



2日目、学校近くの海辺で遊ぶ児童と大学生。随分と打ち解けた様子だった

「進行の都合上、予定外の待ち時間が30分ほど生まれてしまった。その時に学生が自発的に子どもとボール遊びを始め、その輪が広がった」と言う。

筑波大学附属久里浜特別支援学校(齋藤豊校長)は8月23、24日に、自閉症児の家族と大学生らが交流する、サマーキャンプを実施した。学生らが子どもと直接触れ合う場になった他、家族同士での交流の機会にもなった。

PTAの要望で実現

筑波大学附属久里浜特別支援学校は神奈川県横浜市中区に位置し、国立特別支援教育総合研究所と隣接している。幼稚園から小学部まであり、自閉症の子どもの数が通う。

筑波大学附属久里浜特別支援学校「サマーキャンプ」

接し方学び、子どもと遊ぶ

学生たち 保護者の悩みにも耳傾け

学生たちは学校に着くと係を築いている。「年齢に比べてときに力加減ができず、自閉症についてのレクチャーを受けた。幼稚園方になっていないか、他者の石川千尋主事が、自閉症の子とも接するときのポイントを説明した。

石川主事の「大切なのは、好きなことや苦手なことを理解しようとする姿勢」「好きなことで一緒に遊ぶことで、他人と関わることに興味を持たせる」といった話を、学生はメモを取りながら真剣に聞いていた。「子どもが満足するまでたっぶり遊ぶため、教員はい「トイレの世話が大変」へとへとになりながら、関

上がったのだという。筑波大から1〜4年生10人、大学院生2人が参加した。特別支援学校から大学に募集をかけたところ、教

する「異性の場合外出先でのトイレが大変」といったことが上がる、学生は興味深そうに聞いていた。同時に「できなかったことができるようになる喜びは大きい」と語る家庭も多かった。学校でできるようなことを家でできるようになったことを家でもやってくれた「うれしい」という気持ちを言葉やしぐさで表してくれるようになった。海やヤギとの触れ合い、家族と学生らが記念撮影。子どもたちはその写真を切り貼りして、絵を描いたり、シールを貼ったりとデコレーションした。できた作品はラミネート加工し、家族と学生らが記念品として持ち帰った。

参加者それぞれ、得るもの多く

サマーキャンプを主導した工藤久美副校長は、「学生たちは最初緊張した様子だった。自閉症児と関わったことのない学生もいたが、徐々に子どもたちと関係をつくっていた。教員による触れ合い方にフォカスしたレクチャーや、子育ての悩みを家族から生の声で聞いたことは、いい経験になったのではないかと。学生たちが自ら考えて子どもたちと接してくれて、2日間子どもが仲良くなっていったと、家族からも好評だった」と言う。

「進行の都合上、予定外の待ち時間が30分ほど生まれてしまった。その時に学生が自発的に子どもとボール遊びを始め、その輪が広がった」と言う。

日本教育新聞 17 面に掲載
令和 7 年 9 月 8 日 発行

本記事は、日本教育新聞社から掲載許可を得ています。
記事の著作権は、日本教育新聞社に帰属します。
記事の無断での転載はご遠慮ください。